

II部 開発途上国における 住民参加型地域資源管理 への挑戦： 新しいコモンズの生成

東南アジアにおける漁村開発
の経験を踏まえて

東南アジアの海で今 何がおきているか？

グローバル・エコノミーと地域資源
をめぐる問題

ビデオ教材

- フィリピンのサンゴ礁破壊の様子と背景
フィリピンでは漁民によるサンゴ礁破壊が今も続いている。本来、地域の資源や環境と共存しなければならない沿岸漁村の住民が、サンゴ礁をすさまじい勢いで破壊している。

なぜなのか？ 破壊をなくすにはどうしたらよいのか？



水産開発の軌跡

タイの事例

開発の成果

技術革新の進展(1960年代以降)

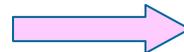
戦前期の生産力水準を凌駕

生産量・額の飛躍的増大

- 新漁法・漁具の導入
- 未利用資源の開発
- 養殖業の発展

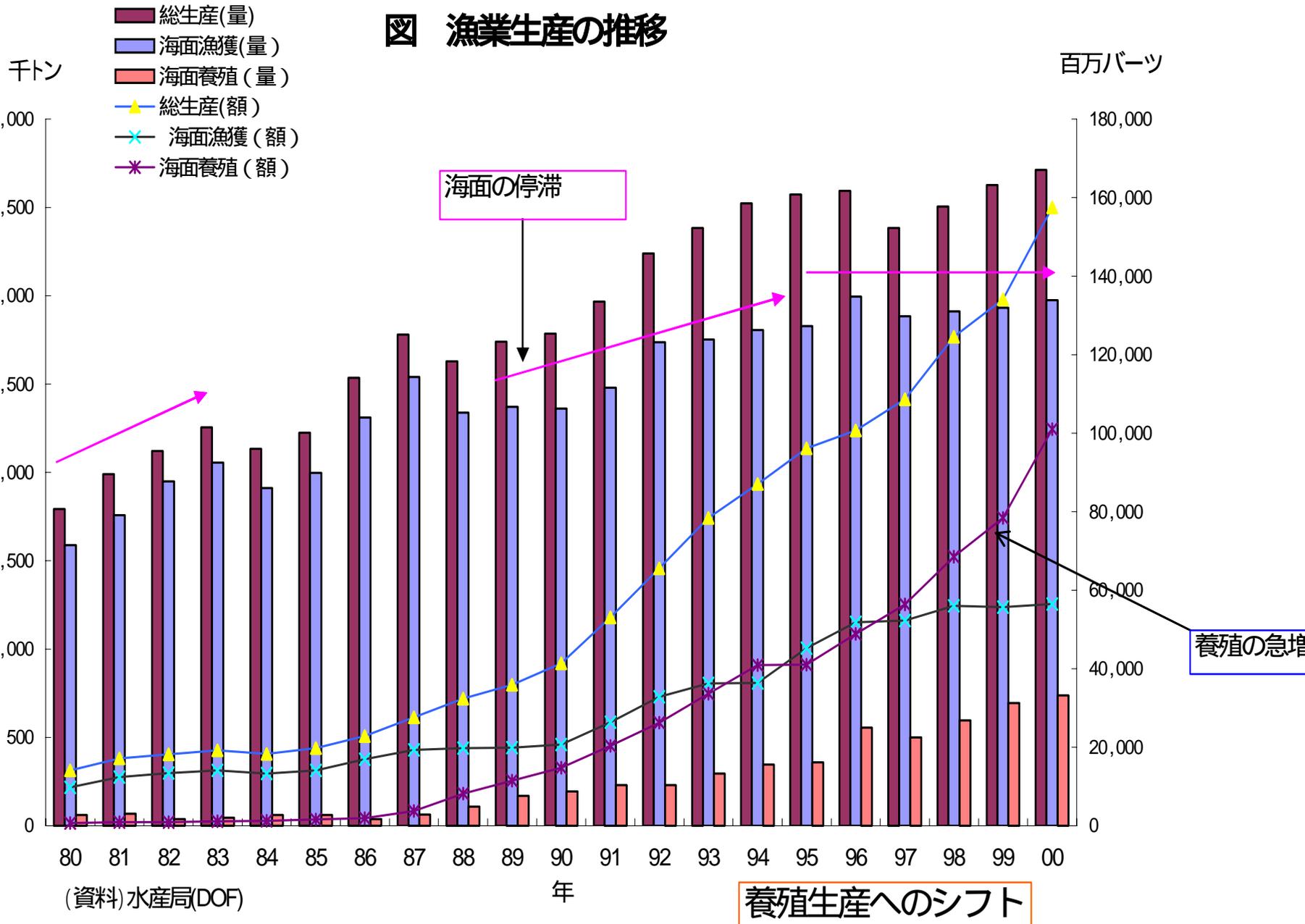
国内外の需要拡大
に対応

生業的・自給的
漁業



商業的・資本的
漁業への編制替え

図 漁業生産の推移



水産開発の軌跡

第1の画期 (60-70年代)

技術革新が進み、漁獲量が飛躍的に伸びる

第2の画期 (70年代-80年代半ば)

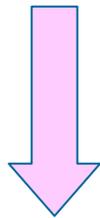
技術革新が一巡し、「二重構造」が定着
漁獲量の停滞・減少(資源の枯渇化)

(参) 二重構造

- 一般には、近代的大企業と前近代的零細企業が並存し、両者の間に資本集約度・生産性・賃金などに大きな格差があるような経済構造。
- 漁業の二重構造は、資本制的漁業生産と生業的・自給的漁業生産の併存として理解される。資本制的企業による漁業生産が未発達な東南アジアでは、比較的規模の大きい漁船を用いた経営体、船外機付漁船のような小型漁船による沿岸域操業を中心にした零細な経営体を対置してとらえている。

第3の画期 (80年代後半-90年代後半)
養殖業の急成長(海面漁獲漁業の停滞)
輸出志向型の加工・食品業の立地

第4の画期 アジア経済危機以降 (97年-)
輸出型水産業のブーム
資源略奪的な生産への傾斜 } 価格競争の激化



産地間競争の激化, 水産業の国際的立地移動
のなかに!

水産業発展の要因

1 技術革新を受け入れる経済主体 近代化が開始された時

1) 生産性の高い商業的漁業 (労働集約的)

→ トロール漁業など高生産性漁法の導入
(資本集約的)

2) 水産物流通ネットワーク (域内貿易)

→ 近代的ネットワーク, 貿易体制への転換

2 国際市場における水産物需要の増大

輸出志向型水産業として発展

エビなどの甲殻類の開発（高価格魚種）

輸出用魚種の生産拡大

* 養殖業も強い輸出志向性

3 流通・加工業者による投資

魚商の漁民貸付，直接投資（生産・流通）

異業種からの参入が増大

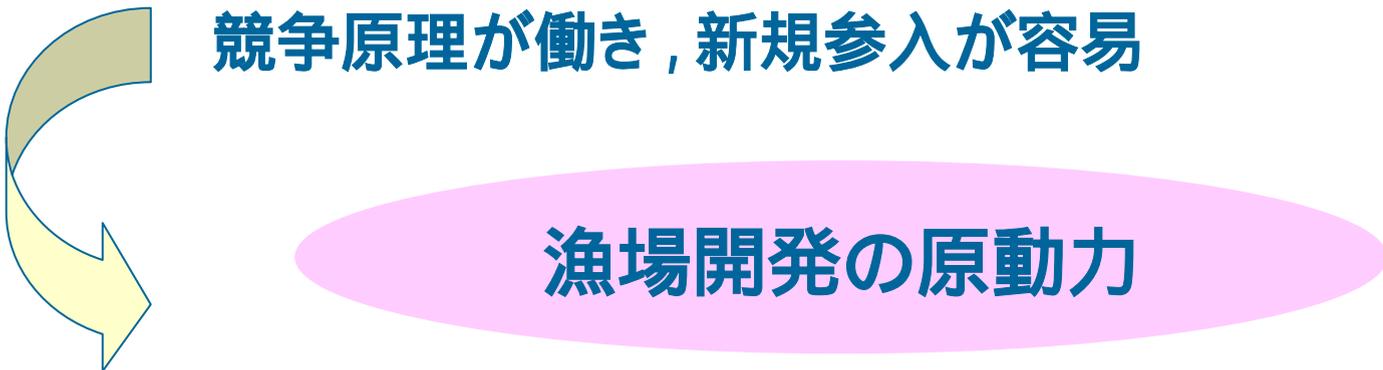
* 近代漁業を投資の場ととらえる

流通業者：生産，流通，加工をアグリビジネス的に統合
する動き

4 オープン・アクセス的な資源利用

漁場利用体系，漁業法が確立する以前に開発が本格化

競争原理が働き，新規参入が容易



漁場開発の原動力

村落共同体

漁獲をめぐる競争に対して制限的に機能せず

生存維持の倫理，互酬的なシステムが崩壊に向かう

過渡的な開発戦略: 資源利用型 産業の育成

基本戦略:

豊富にある農林水産資源の開発, 安価な労働力に
依拠した輸出志向型の流通・加工業の育成

→ 開発の初期条件を生かす

→ 不足する外貨を獲得し, 産業化への次のステップ

東南アジア的な開発方式 (Agro-based
Industrializing Countries)

水産業：国民経済への貢献

1) 漁獲・養殖漁業生産の拡大



資本投資の拡大，就業機会の増大

2) 水産資源の利用を軸とした産業化



関連産業の台頭

資材供給，流通・加工業，貿易業，etc

開発のインパクト： 漁業生産・流通の変貌

1 水揚げ魚種の変化

浮魚類を中心にした水揚げ → 底魚類の割合増大

総水揚げ量の急増

魚種構成の二極化

- 1) 単価の高いエビ・イカ類 (金額)
- 2) 単価の低い底魚類 (量)

2 漁具・漁法の近代化

ナイロン製漁網, 動力漁船

トロール漁業, まき網漁業

→ 当初は大規模漁業者を中心に普及

70-80年代にかけて零細漁民に広く普及
魚探など漁船のハイテク化が進展(80年代後半から)

漁獲努力量(Catch Effort)の増大

“Multi-species” & “Multi Types of Gears”

(多種類の魚種を対象, 多様な漁具を使用)

3 水産物の消費・利用形態の変化

塩干ものから生鮮へ ← 流通施設の整備

中高級魚の消費 ← 経済成長

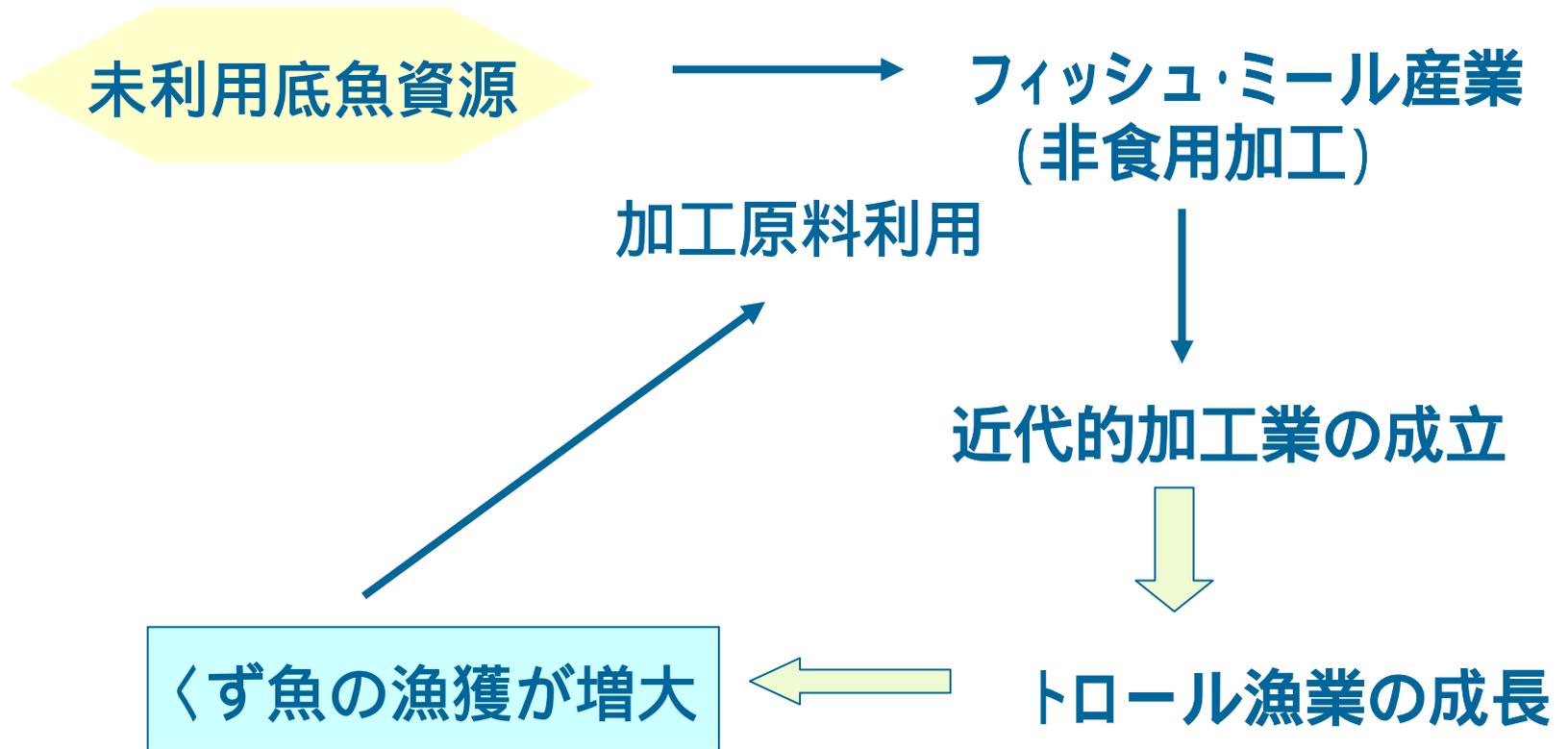
(都市部中心, 業務用の増大)



輸出需要を補完する形で, 国内需要が拡大

国内消費を対象にした商品化が進展
(レストラン用の養殖魚, 低価格化)

4 加工原料の利用(魚粉生産から出発)



食品加工業の立地が進み、食用加工原料として
利用される割合が高まる

5 水産物貿易の多角化と高価格化

1) 品目

伝統的な輸出品 塩干もの

→ 中高級魚種の生鮮・冷凍もの

2) 輸出相手先

伝統的には域内貿易

→ 日本向け, 欧米先進国へ

3) 輸入

伝統的な輸入品 塩干もの

→ 低価格の缶詰 (後に自給)

水産開発の進展

途上国型の貿易構造

輸出 高価格の生鮮・冷凍
輸入 低価格の塩干もの・缶詰

金額バランス 輸出 > 輸入
出超の構造

- 1) 海外からの技術・資本の導入
- 2) 海外からの輸出圧力(需要)

水産資源開発のインセンティブに！！

演習問題

- 1) 開発途上国のなかには、自国にある農林水産資源を集中的に利用することによって、経済開発をはかろうとする国が多い。資源利用型経済開発のメリット・デメリットを述べなさい。
- 2) オープンアクセス的な状況にある水産資源を開発する際、どのような点に配慮しておかねばならないだろうか。